

第三章 近世・近代・現代

第一節 明治国家の形成と日本の近代化

I 幕藩体制の解体と大政奉還

三代将軍家光は、参勤交代制をはじめとする大名統制の強化と、鎖国体制の確立によって、いちおう幕藩体制を安定化した。

この鎖国体制は、寛永一四年（一六三七）に起こった島原の乱を契機として強化されたもので、以来、国民の海外発展への門戸を閉ざし、約二〇〇年の間、わが国は世界的情勢から孤立した道を歩むことになる。しかしその反面では国内の開発が進み、文化においても日本独自のものが発展したことを見逃すことはできない。

その代表的なものが元禄文化であろう。従来、文化は支配階級のものであったが、この時代の町人の勃興はめざましく、それに伴って町人の文化が創造された。同文化は当初、商品経済の中心であった京都・大坂などの上方で開花し、上層町人、富裕な農民を担い手とした。そして、その波紋はしだいに庶民の間にも広まり、庶民にもはやされ

る文芸や美術が出現することになる。

なお、幕藩体制の推移についてここでは詳述を避け、いっきに幕藩体制の解体について話を進めることにしよう。

(1) 鎖国時代における世界の動きと開国要求

わが国が鎖国主義をとっている間、世界はどのような動きをしていたか、まず、そのことからふれることにしよう。

元禄元年（一六八八）のイギリスの名誉革命、安永五年（一七七六）のアメリカの独立、寛政元年（一七八九）のフランス革命を経て、欧米ではしだいに近代国家と国民的統一が進行した。

これと同時に、一八世紀末から一九世紀にかけて、産業革命の波がイギリスを中心として欧米に広がっていった。この産業革命は、資本主義の発展を促し、強力な体制を整えた欧米の列強は、機械によって大量生産された商品を売りさばく市場と原料を求めてアジアへと進出しはじめた。

まず、バルカン方面にはオーストリアとロシアが、中近東方面にはイギリス・フランスの手が伸び、事実上の半植民地化が進められていった。

イギリスのインド支配も、インド征服をはじめてからちようど一〇〇年かかった安政三年（一八五六）に完成した。

また、東南アジアへもイギリス・フランス・オランダの勢力が進出して、大部分の地域を分割・併合する動きがあった。

中国への進出は、天保一〇年（一八三九）、あへんの輸入に強硬な姿勢をとった清国

◆産業革命

蒸気機関の利用を中心とする機械の発明。工場制手工業が衰えて、機械制大工業制が生まれるなど、影響は資本・経営・労働・金融などの関係から政治的な面まで及んだ。普通一七六〇年ごろから一八三〇年ごろまでのイギリスの变革についていうが、フランス・ドイツなどの大陸諸国にも続いて起こった。日本では一八八〇年代の紡績業の機械制化に始まる。

に対して、イギリス軍は優秀な火器で清軍を粉砕、天保一三年（一八四二）、南京条約によって香港を獲得したほか、広東・上海などを開港させた。ついで安政三年（一八五六）のアロー号事件を契機に、イギリスはフランス軍とともにふたたび戦争をおこし、万延元年（一八六〇）、北京を占領して北京条約を結んだ。この結果、香港対岸の九龍半島もイギリスに奪われ、清国は貿易の自由を確認させられることになる。租界制度もこのころにつくられ、列強による中国の半植民地化の基礎が固まることになる。

このように欧米の諸国は自由貿易を旗印としてアジアに迫った。まだ朝貢の形で貿易を行っていたアジアの後進国にとって、先進国の自由貿易が大砲の威力のもとにおしつけられたとき、それは事実上の植民地化ないしは半植民地化への道を意味した。

だが、こうした列強の進出に対して、アジア諸民族はけっして無抵抗ではなかった。インドでは、イギリスがインド征服を完成した安政三年（一八五六）の翌年に、セポイと呼ばれるインド人傭兵による武装反乱がおこり、中国でも嘉永四年（一八五二）には、太平天国とよぶ革命政権がつくられた。

こうしたアジア民族の抵抗は、欧州の列強をして軍事力一点張りの進出が必ずしも利益ではないことを理解させた。むしろ、国内の支配力と結びつき、これを利用することのほうが市場獲得に有利であるということがわかったのである。したがって、欧米列強の日本に対する幕末・維新期の政策は、そうした教訓の上になつたとられたことを注目すべきであらう。

一方、アメリカの中国に対する貿易は、アメリカ独立後の一七八〇年代であったが、一九世紀になると、アメリカの機械による大量生産はめざましく、とくに紡績業におい

◆太平天国

漢族の洪秀全が満州族の清朝による支配に抗して建て、一〇数年続いた独立政権。

洪を中心に拝上帝会の名で出発した秘密結社は、原始キリスト教の平等思想を農業生活上の平等主義に結びつけ、あへん戦争で権威を失った清朝に反抗して広西省で決起（一八五二）した。蜂起当初三、〇〇〇余人であった農民軍は、一八五三年の南京占領の際には一〇〇万人の大軍となり、「田あれば、共に耕し」という趣旨の天朝田敵制度を公布した。一八五五年以後、地主の軍隊と外国義勇軍の攻撃を受け、一八六四年、首都南京を失って崩壊した。

太平天国政府は、男女平等、商業政策の面でも進歩的な政策を打ち出した。中国ブルジョア民主主義革命の先駆とみることができる。彼らは弁髪を廃して長髪をたくわえたので長髪賊と卑称された。

てその傾向はきわめて顕著であった。このためアメリカは、そのはけ口を清国の市場に求めたのである。イギリスの南京条約について、アメリカも弘化元年（一八四四）、米清通商条約を結び、中国積極策にいっそうの拍車をかけた。

こうした情勢のなかで、嘉永元年（一八四八）、メキシコとの戦争で得たカリフォルニアに金鉱が発見され、西部への関心が高まり、さらにアメリカは太平洋のかなたのアジアに眼を向けることになる。ここに、さきのアメリカの極東市場拡大の要求と結びついて、一九世紀半ばには太平洋の横断航路開設が提起されるにいたるのである。

アメリカがアジアへ、そして日本へ開国を迫ったもう一つの原因は、捕鯨業の北太平洋進出があげられる。天保六年（一八三五）から二〇年間は、アメリカ捕鯨業の黄金時代で、捕鯨船はさかんに日本の近海で操業し、遭難船漂着事件もしばしばおこった。そこでアメリカは、これらの捕鯨船の薪水・食料の補給港や避泊港を要望したのである。こうした事情や背景にもとづいて、嘉永六年（一八五三）六月、アメリカ使節ペリーは、日本に開国を求める大統領の国書をもち、四隻の軍艦を率いて浦賀にやってきたのである。世にいう太平の眠りをさます黒船がそれである。

(2) 開国前後の国内情勢

産業革命を契機として欧米の列強がアジアへ眼を向け、活発な動きを開始したころ、日本はまだ太平の眠りのなかにあった。だが、その幕藩体制にもしだいに矛盾が現われ、崩壊への足がかりができつつあったことを否定できない。その幕藩体制を揺がす代表的なものが地主・小作制の拡大である。

徳川期における商品生産の発展は、小農民経営の向上をもたらしたが、同時に商業高

◆ペリー (Matthew calbraith perry)

アメリカの海軍軍人（一七九四～一八五八）。一八五三年七月、浦賀に来航し、幕府にファイルモア大統領の国書を手渡し、翌年、神奈川で日米和親条約を締結した。著書に「アメリカ艦隊遠征記」がある。

◆黒船

一七世紀前後の南蛮船や洋式の外国船の呼び名。黒く塗った欧米の帆船または蒸気船を江戸末期の日本人が一種の恐怖感をもって呼んだことば。

利貸資本の農村侵入をうながし、農民の階級分化が促進されることになる。年貢の増徴も小農民の生活を破壊し、一方、質入れの形式で土地の兼併が行なわれた。その結果、小農民は小作人の地位に落ちた。新田開発も必ずしも小農民の利益にはならなかった。とくに町人請負の新田が増加すると、小農民は小作人として組織され、典型的な地主・小作関係が広汎に展開したのである。

この地主・小作制の展開は、農村の荒廃をもたらし、本百姓の維持と年貢の確保を根本とする封建経済をつき崩し、その上にたつ幕藩体制を動揺させた。

幕藩時代、天和・正徳の治をはじめとする政治の刷新、享保・寛政・天保の改革などが実施されたが、とくに天保期にはいると、幕府を頂点とする封建支配体制の矛盾がいちだんと深刻化した。天保の改革は、こうした危機を克服するため、水野忠邦を老中首座にすえて行なわれたものである。だが、水野忠邦の失脚によって同改革は頓挫し、幕藩体制は大きくゆれ動くことになる。

また、弘化・嘉永期は、崩壊しつつあった幕藩体制のなかで、門閥保守派と改革派、さらに改革派内部での対立がしだいに激しくなり、政争が繰り返された。

このような国内情勢のなかで、あへん戦争の真相がつきつきと伝えられ、海防問題が深刻になっていくところへ、弘化元年（一八四四）、オランダ国王は幕府に親書を送って世界情勢の変化を説き、鎖国政策をやめるように勧告した。そしてさらに、アメリカが日本と通商を求めていることを書いた『オランダ風説書』を手渡した。

おそらく幕府内部では相当の当惑があったと思われるが、その対応策がでないうちに、現実にはペリーがやってきたのである。幕府のときの老中・阿部正弘は、この重大

◆あへん戦争

中国の清が阿片の密輸を禁止したことに抗議して、イギリスが起こした戦争（一八四〇～一八四二）。

一八世紀までにインドを植民地にしたイギリスは、極東政策の次の重点を中国に置き、清に貿易を拡大することを迫った。同時に広東一港で行なわれた清との貿易であへんの輸出を激増させた。その結果、清から銀が大量に流出することになり、重大な問題となった。清は林則徐を派遣して密輸禁止の強い処置をとらせた。

これに対しイギリスは「貿易の自由」を侵害するものとして海軍を派遣し、広東省沿岸はもとより、天津、上海、南京まで攻撃した。一八四二年、清は屈服して南京条約を結び、上海など五つの港を開き、香港島を譲り、また賠償金を支払うことを約した。イギリスは翌年、南京条約の追加条約を結んで中国の関税自主権を奪い、中国を半植民地化する第一歩をふみ出した。

性を考え、前例を破ってこの黒船渡来を朝廷に報告し、諸大名以下にも意見を求めた。諸大名の意見は硬軟さまざまであったが、結局のところ、鎖国の「祖法」を守りながら、なんとかかつじつまを合わそうという事なかれ主義の意見が強かった。

幕府からの回答を翌年まで延期されたペリーは、安政元年（一八五四）、ふたたびやってきた。そして、幕府は神奈川県で日米和親条約（神奈川条約）を結んだのである。その内容の中心は、アメリカ艦船への物資の補給と漂流民・渡来船の優遇であり、そのため下田・函館の二港を開くというものであった。ついで幕府は、イギリス・ロシア・オランダとも同様の条約を締結することになる。

なお、幕府が事態を朝廷に報告したのは、天皇の伝統的な権威を利用し、さらに意見を諸大名以下に求めたのは、これによって対外危機に直面した支配体制の強化を意図したものであったといえよう。しかし、このことは幕府の独裁制が根底から揺らいだことを意味し、これをきっかけとして有力な諸大名の発言権が増し、幕政の改革を求める皮肉な結果となったのである。

(3) 公武合体・尊皇攘夷運動の激化

老中・阿部正弘は、協調政策による挙国体制によって、当面する外交・国防問題を処理しようとした。これはともかく公武合体・雄藩合議政権への方向をうち出したものであった。だが、この協調・挙国政策も阿部正弘の死後、崩れることになる。

阿部正弘の後を継いだ老中・堀田正睦（佐倉藩主）は、西洋文化に興味を持ち、開国政策の支持者であった。正睦の背後には溜間詰めの譜代大名の後押しがあった。この溜間詰めの諸大名を牛耳っていたのが彦根藩主・井伊直弼であった。ここに、攘夷主戦論

を主張していた徳川斉昭以下、松平慶永、島津斉彬を代表とする大廊下詰め大名、大広間詰め大名の一派との対立が生じた。

この対立は、一三代将軍家定の後継ぎ問題を契機にいちだんと激化した。この後継ぎ問題に敗れた攘夷主戦論派はいっせいに井伊攻撃に立ち上がった。ここに尊王攘夷と倒幕開国をスローガンとする対立が深まった。

この事態に、幕府の危機をみてとった井伊は、徹底した弾圧政策をとり、安政五年（一八五八）から斉昭・慶永以下、反対派の大名・公卿・幕吏・尊攘派志士をいっせいに押さえはじめた。そして翌年、橋本左内、頼三樹三郎、吉田松陰らを死刑に処した。世にいう安政の大獄である。血は血をよび、この弾圧に反感をもった水戸浪士を中心とした尊攘派は、万延元年三月三日、桜田門外で登城途上の井伊直弼を暗殺した。桜田門外の変である。

井伊直弼の横死後、幕閣の実力者安藤信正は、老中首座に久世広周を迎えた。この久世・安藤政権は、尊攘論の台頭とともに発言権を強めてきた朝廷と結びつき、いわゆる公武合体によって、その苦境を切り抜けようとした。孝明天皇の妹和宮を将軍家茂と強引に結婚させたのもその一例であろう。

だが、この結婚はかえって尊攘論者の怒りを買うことになる。

尊攘派の拠点は大坂で、京都でもしだいにその勢力を拡大したが、文久三年八月一八日の政変によって、尊攘派志士は一夜にして京都を追われ、三条実美ほか七郷も大坂へ落ちる（七郷落ち）ことになる。この政変の主役は会津藩と薩摩藩であった。

(4) 薩長同盟と大政奉還

◆安政の大獄

安政五年（一八五八）、大老井伊直弼が、通商条約の締結や将軍の跡継ぎ問題で、彼の政策に反対する尊王攘夷派の公卿・大名・志士を処分した事件。

◆桜田門外の変

一八六〇年、大老井伊直弼が、水戸・薩摩の浪士に江戸城桜田門外で暗殺された事件。開国強行や安政の大獄に反感をもった浪士が行なったもの。

前述の政変後は、保守派が台頭し、逆に尊攘派が没落することになる。この情勢をとり返そうと、久坂玄瑞・真木和泉らは、長州藩の諸隊の一部をひきいて上京し、元治元年（一八六四）七月、蛤御門その他を守っていた会津・桑名・薩摩藩の軍と一戦を交えたが敗れた（禁門の変）。

これによって長州藩は朝敵とされ、幕府は長州征伐（第一次）を実施した。おりしも長州では、イギリス・フランス・アメリカ・オランダの四国連合艦隊に攻められ、苦境のなかにあった。内外からの挟みうちにあった長州藩は屈服し、当時、藩庁を握っていた保守派は、禁門の変の責任者である三家老以下を処断して幕府に謝罪した。

この保守派による体制を覆えそうと高杉晋作らは馬関（下関）に挙兵し、やがて藩権力を奪回した。慶応元年（一八六五）のはじめのころである。このとき高杉らは、もはや尊攘派の古い殻を投げすてて、討幕派として成長していた。

そのころ薩摩藩でも、主導権は大久保・西郷らに移り、かれらも討幕派へ転じつつあった。

長州・薩摩両藩のなかに立ち、慶応二年（一八六六）一月二一日の薩長同盟を成立させたのが、土佐藩の坂本龍馬と中岡慎太郎である。歴史はまさにその潮流を変えようとして激動のなかにあった。

こうしたなかで幕府は、第二次長州征伐に乗り出そうとした。慶応二年五月のころである。だが幕府の支配力はかなり低下していたため、有力な諸大名はきわめて消極的であった。これに対し長州藩は挙藩体制を整え、洋式軍隊で幕府軍にあたった。戦いの結果は、いたるところで幕府軍が敗北を喫した。そして慶応二年七月、將軍家茂が病死し、

◆禁門の変

一八六四年、長州藩士と皇居の門を守る会津・薩摩藩士との戦い。長州側が敗れ、朝敵として長州征伐を受けるようになった。蛤御門の変ともいう。

◆坂本龍馬

江戸末期の土佐藩の志士（一八三六―一八六七）。初め尊王攘夷の志士として活躍。のち勝海舟らと交わり、開明的思想をもつ。海援隊を組織し、薩摩・長州両藩の和解に尽力。近代的統一国家構想をもち、大政奉還を主張。京都で暗殺された。

徳川慶喜が一五代將軍になると、慶喜は家茂の喪を口実に、幕府の征長軍をひきあげさせたのである。

こうしたなかで薩長を中心とする新しい統一権力をめざす倒幕勢力と幕府が真つ向うから対立することになる。

とくに攘夷主義者ではあったが、倒幕論者ではなかった孝明天皇の急死は、当時、すでに開国策に転じていた討幕派にとってひとつの障害がなくなったことを意味し、それまで追放中であつた親王・公郷が許され、岩倉具視らが公然と政治活動を開始した。

以後、慶喜が慶応三年一〇月一四日に大政奉還を朝廷へ申し出、王政復古の大号令が出るまでさまざまな曲折はあつたが、ここに永い間にわたる武家政治が終焉し、新しい時代の幕があくことになる。

II 明治新政府の成立

慶応四年（一八六八）三月一四日、明治天皇は京都御所内の紫宸殿ししてんに公郷・諸侯および百官の群臣を率いて、天地神明に誓うという形で、五ヵ条からなる新政の基本方針（五ヵ条の誓文）を明らかにした。以後、新政府による集権政治の強化や行政改革が実施されることになるが、その主なものを列記すると次のとおりである。

(1) 明治改元と遷都

一八六八年九月、年号は明治と改められ、以後は天皇一代に年号一つと定められた。これを一世一元の制という。また明治二年には江戸（東京）遷都が行なわれ、東京が事

実上の首都となった。

(2) 版籍奉還・廃藩置県

新政府の機構はしだいに整えられていったが、いぜんとして各藩は独立した状態にあった。その状態を打破するためにとられたのが版籍奉還（版は版図＝領地、籍は戸籍＝人民）である。これは廃藩の前提として、木戸・大久保・板垣らの薩・長・土三藩出身の新官僚で協議され、肥前（佐賀）藩が加わって、明治二年正月の四藩主奉還建白で開始され、諸藩も相ついでこれにならった。そして、藩主はあらためて知藩事（藩知事）に任命された。

この版籍奉還に伴って、政府は藩政改革を強行し、明治四年七月、廃藩置県が断行された。このため諸藩の知事（旧藩主）は、家禄と華族の身分を保障されて東京に移された。そして、旧藩主に代って東京・京都・大阪の府には知事が、県には県令が中央から派遣された。ここに各藩における旧藩主勢力は根こそぎ一掃され、藩体制は完全に解体し、中央権力に統合された。

(3) 官僚制と軍事力

廃藩置県によって維新政権の様相は一変した。神道的・復古的な色彩は一掃されて、太政官の一本にしぼられ、その下の正院が政務の全般をつかさどる最高の機関となった。その後、この太政官制も改正され、明治一年には内務省が設置された。

徴兵令が發布されたのは明治六年一月（ただし、太陽暦採用によって明治五年一二月三日が六年一月一日となった）である。そして明治一年には、当初、陸・海軍省にあった統帥部が、天皇に直属する参謀本部となって政府から独立し、後の軍部による政府

牽制の基礎となった。明治一四年には憲兵制度ができ、翌一五年には軍人勅諭が出された。

また明治一二年には警視庁が置かれ、全国の警察網の中心となった。警官は「らそつ」と呼ばれ、士族が多く採用された。

(4) 身分制度の撤廃

明治二年には、それまでの公郷や大名は華族となり、また、藩士の身分は士族と卒族そつぞくの二つに分けられた。ついで明治五年には卒族を改めて、一部は士族へ、一部は平民に編入された。

一方、明治三年には平民に苗字が許され、明治四年には幕藩体制下の土農工商の身分制度は、華族・士族・平民に整理されている。しかも、おのおの間の結婚の自由が認められ、職業も住居も自由にようになった。また、それまでの宗門人別帳や戸籍は身分で区別されていたが、明治五年に壬申戸籍じんしんが作られ、華族・士族・平民の差別なく、屋敷・家屋を単位にして「家」に戸主を定め、戸主が「家」を代表することとされた。こうして、当時の新政府が旗印とした「四民平等しひん」が実現した。

(5) 大教宣布

絶対主義的な権力を早急に作り出すためには、天皇の権威を高めることが必要であった。このため新政府は、民衆に対してしばしば告諭を出して天皇の権威を強調した。そして、古代律令制度の中心であった神祇官を再興したり、神道を保護して神仏分離が実施された。明治三年一月に出された「大教宣布だいきょうせんぷの詔書」は、神道を天下に布教し、祭政一致、天皇に帰一することがうたわれていた。この時期、仏寺や仏像がつぎつぎに打

ち毀される事件も起こっている。

(6) 帝国憲法の成立と諸制度の施行

明治六年、ヨーロッパから帰国した木戸孝允は、ただちに憲法制定の意見を提出した。そして、明治九年、元老院に憲法起草が命じられ、草案が作られたが、結局、岩倉具視などの氣にいらす採用されなかった。明治一五年、政府は伊藤博文を憲法調査のためヨーロッパに送った。博文はプロシヤ王国の憲法とその運用をグナイストやスタインから教わり、翌一六年に帰国した。そして、宮中に制度取調局を設け、自らその長官となつて、井上毅・伊東巳代治・金子堅太郎に協力させて憲法起草にとりかかった。起草は極秘のうちに進められた。

明治二一年、天皇の最高諮問機関として枢密院が設置され、初代長官伊藤博文のもとに、主として薩長土肥出身がほとんどを占める一二人の枢密顧問官が任命された。ここで慎重審議ののち、明治二二年二月一日の紀元節の日を期して、大日本帝国憲法が發布された。

そのほか、明治一三年には刑法および治罪法が改定され、同法は明治一五年から施行された。民法はフランスの法学者ポアソナードらによって起草されたが、結局、日本の伝統的な家族制度にマッチしないということで破棄され、検討の結果、刑事訴訟法が明治二三年、民事訴訟法が明治二四年、商法が明治三二年から施行された。

このように明治の初期は、文字どおりの維新时期で、世の中のめまぐるしい動きを推察することができる。

しかし、幕藩体制下の特権を忘れきれない士族のなかには、政府のこうしたやり方に

◆岩倉具視

江戸末期から明治前期の政治家（一八二五—一八八三）。公武合体に尽くし、のち尊王攘夷の志士と交わつて、大久保利通らと倒幕運動をおし進めた。維新後、政府の中心人物となり、一八七一年の遣米・遣欧使節。帰国後、征韓論に反対し、自由民権運動などを弾圧し、絶対主義的政府の基礎を築いた。

◆伊藤博文

政治家（一八四一—一九〇九）。長州藩の足輕の子に生まれ、松下村塾に学び、尊王攘夷運動に奔走。一八六三年、ロンドンに留学し、初めて世界の大勢に目を開く。一八七一年には岩倉使節に従つて欧米を視察。明治政府の基礎を固めた。一八八五年、初代の内閣総理大臣に就任。憲法草案を起草。一八九〇年の帝国議会の開設に当たつては、最初の貴族院議長となった。一九〇九年、ハルビン駅頭で朝鮮の青年安重根に射殺される。

不満を持つ者もいた。明治七年、佐賀の征韓党と憂国党は、江藤新平を迎えて兵を挙げ、県庁を襲った（佐賀の乱）。さらに明治九年に廢刀令が出され、家禄が停止されると、士族の不満は増大し、熊本しんぶうれんの神風連の乱、福岡の秋月の乱、また山口の萩の乱などが起こった。

なかでも西郷隆盛を中心として、明治一〇年に起こった西南戦争は有名で、明治政府に大きなショックを与えた。九州各地での激戦の末、西郷以下は鹿児島かごしまの城山で斃れた。それは、当時「土百姓」軍と士族からあざ笑われていた政府の常備軍と警察力の勝利を意味し、政府に対する武力反抗の無意味さを立証した。征韓論分裂を契機とする下野勢力の士族派・民権派のうちの一つである士族派は、こうして歴史の進行の必然のなかに潰え去っていったのである。

III 千葉県の誕生

(i) 廃藩置県前の房総の支配

明治元年、房総には次の一六藩があった。

【安房国】

▽加知山藩（一万二、〇〇〇石）

▽館山藩（一万石）

【上総国】

▽久留里藩（三万石）

◆西郷隆盛

通称は吉之助。号は南洲。江戸末期から明治初期の政治家、軍人（一八二八—一八七七）。薩摩藩の下級武士の家に生まれる。島津斉彬に見出され、王政復古の原動力として活躍する。一八七〇年、陸軍大將兼参議となり廃藩置県を断行。一八七三年、征韓論を唱えて官職を辞し、一八七七年、西南戦争を起し政府軍に攻撃されて自害した。

▽飯野藩（二万石）

▽佐貫藩（一万六、〇〇〇石）

▽鶴牧藩（一万五、〇〇〇石）

▽一ノ宮藩（一万三、〇〇〇石）

▽大多喜藩（二万七、〇〇〇石）

※請西藩は朝命に抗したという理由で、明治元年一二月七日、領地を没収された。

【下総国】

▽佐倉藩（二万石）

▽関宿藩（四万八、〇〇〇石）

▽多古藩（一万二、〇〇〇石）

▽小見川藩（一万石）

▽生実藩（一万石）

▽高岡藩（一万石）

▽古河藩（八万石）

▽結城藩（一万七、〇〇〇石）

このほか、元年七月から九月にかけて駿河・遠江から移封された次の七藩があった。

▽菊間藩（上総、五万石）

▽金崎藩（上総、一万石）

▽長尾藩（安房、四万石）

▽花房藩（安房、三万五、〇〇〇石）

▼小久保藩（上総、一万石）

▼鶴舞藩（上総、六万石）

▼柴山藩（上総、五万三、〇〇〇石）

そしてさらに、旧幕府領が房総三国の各地に存在していたのである。これら旧幕府領のうち、安房上総については、元年七月二日に久留米藩士・柴山典（文平）が知県事に任命された。役所は当初、市原郡八幡に置いたが、その後、埴生郡長南宿（長生郡長南町）の淨徳寺に移した。

下総については、元年八月八日、肥後藩士・佐々布直武（貞之丞）が知県事に任命され、東京の薬研堀に事務所を置いた。同年一二月、佐々布は職を辞し、水筑龍（佐伯藩士）が下総知県事となった。

以上のように明治元年における房総三国は、一六名の旧藩主、七名の移封藩主による藩主支配地と、新しく新政府から任命された二名の知県事の管轄地からなっていた。なお、明治二年一月一三日に下総知県事の管轄地に葛飾県が置かれ、下総知県事であった水筑龍が権知事に任命された。また同年二月二〇日、安房上総知県事の管轄地に宮谷県が置かれて、柴山典が権知事に任命された。両県は明治四年一月一三日まで存続し、宮谷県は木更津県、葛飾県は印旛県にそれぞれ統合された。

(2) 廃藩置県と房総三県

明治四年七月一四日の廃藩置県に伴って、房総も旧体制の統廃合が行なわれた。

すなわち、安房・上総一円を管轄する木更津県と、下総国九郡（千葉・印旛・埴生・葛飾・相馬・猿島・豊田・岡田・結城）を管轄する印旛県と、下総国三郡（香取・海上

◆宮谷県の管轄地

▼安房 五万六、〇〇〇石余（四郡のうち諸藩の領地を除いた分）

▼上総 八万七、八〇〇石余（上総国のうち諸藩の領地を除いた分）

▼下総 一二万二、〇〇〇石余（匝瑳、海上、香取三郡のうち）

▼常陸 一〇万四、七〇〇石余（河内、信太、行方、鹿島四郡のうち）

合計 三十七万一、七〇〇石余

明治四年五月一七日、権知事・柴山典は、知事に任ぜられたが、同年七月二七日職を免ぜられ、岩鼻県（上野国）大参事・柴原和が宮谷県権知事に任ぜられた。

・匠瑳)をふくむ新治^{にいはら}県の三県に分属することになった。

木更津県の県庁は木更津(木更津市貝渕)に置かれ、宮谷県権知事であった柴原和が権令^{ごんれい}となった。

印旛県の県庁ははじめ佐倉に置く予定であったが、便宜が悪いという理由で下総国葛飾郡本行徳村(市川市本行徳)の徳願寺に仮庁を置き、支庁を佐倉と関宿に設けた。明治五年一月、本行徳村の仮庁は葛飾郡加村(流山市)の葛飾県庁舎に移し、同年八月、佐倉・関宿の支庁は廃止した。県令には旧小菅県知事・河瀬秀治が任命され、ついで六年二月には木更津県令・柴原和が兼任した。

新治県は、常陸の土浦に県庁が置かれ、権令には旧若森県権知事・池田種徳が任命された。

(3) 千葉県の誕生

明治六年六月一五日、木更津県と印旛県が合併し、千葉県が誕生した。初代権令には木更津県権令・柴原和が任命され、県庁を千葉町に開設した。当初、庁舎は千葉神社神官・千葉良胤^{よしたね}の居宅であったが、明治七年二月火災にかかり焼失したため、千葉町の来迎寺に移し仮庁舎とした。新庁舎が落成したのは明治七年九月、同月三〇日、開庁式が行なわれた。

千葉県の郡数は二二(安房四郡、上総九郡、下総九郡)で、村数は二、六四〇、町数一四五、人口は一〇三万七、五四六人であった。

明治八年五月七日、新治県を廃して、その管轄地を千葉県と茨城県の二県に分属することになった。この結果、下総三郡(香取・海上・匠瑳)は千葉県に編入された。同時

にそれまで千葉県管轄地であった下総国猿島・結城・岡田・豊田の四郡および葛飾郡のうち三町四ヵ村、相馬郡のうち二ヵ宿九九ヵ村が茨城県へ管轄替えとなり、さらに明治八年七月、葛飾郡の一部が埼玉県へ編入された。こうして、茨城県と利根川をさかいとする千葉県の行政区画が固まった。

第二節 資本主義の発展と日清・日露戦争

I 日清・日露戦争と文化の近代化

明治九年（一八七六）、日鮮修好条規にっせんしゅうこうじょうぎが結ばれた。これは当時、清国の支配下にあった朝鮮を独立国とし、開港による通商貿易や、日本の領事裁判権を規定したものであった。もちろん清国はこれを認めず、朝鮮をめぐる日清両国はしだいに緊張の度を加えていった。

そして、明治二七年（一八九四）に朝鮮で発生した東学党とうがくの乱を契機に、日清両国の対立は急速に高まり、同年八月一日、日清戦争が勃発した。同戦争は日本の勝利に帰したが、当時、日本は欧米列強と比較して軍事力で格段の差があったことから、これを契機に軍事主義的な色彩を強めると同時に、資本主義発展への大きな足がかりにもなったのである。日清戦争後の一〇年間に於ける機械・綿糸紡績業の発展は著しく、明治三四年（一九〇一）には二、〇〇〇万円の巨費を投じて、官営の八幡製鐵所が発足している。この製鐵所開業の意義は、わが国の重工業近代化に見通しを与えるとともに、軍事工業の基礎を作ったことであろう。

また、日清戦争を契機に、わが国の海外貿易も急速に伸長した。輸出では、従来の生

◆東学党

朝鮮で、儒教、仏教、道教を折衷した東学を信じ、西学（天主教や西欧文明）を排斥した一派。李朝末期に結党。一八九四年、一揆を起した。この反乱鎮圧を口実に日清両国軍が出兵し、日清戦争を誘発した。

糸・茶のほか綿糸・絹織物の伸びが著しく、輸入は棉花などの原料品、機械器具類などが急増した。このことは日本の資本主義の発達と関連した現象であった。

一方、世界の資本主義は、一八七〇年代までの自由競争の段階から、一九〇〇年前後にかけて帝国主義の段階にはいっていき、これらの帝国主義列強は、アフリカを分割し、太平洋諸島からさらに中国へと迫ってきた。この中国進出に拍車をかけたのが、明治三年（一九〇〇）、清国でおこった義和団ぎわだんの乱である。日本、ロシア、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカなどの連合国は軍隊を派遣して北京を占領、清国との間に北京議定書を結んだ。列強による中国分割である。

当時、ロシアは満州占領を画策し、これにもっとも脅威を感じたのが日本とイギリスであった。こうした背景から明治三五年（一九〇二）二月、日英同盟が締結された。ロシアにとって、これは大きなショックであった。そして朝鮮・満州に対する日本とロシアの思惑は険悪の度を加えていった。

日露戦争は、明治三七年（一九〇四）二月一〇日の宣戦布告に先立つ、二月八日の仁川港じんせんおよび旅順港における日本艦隊の奇襲攻撃によって火ぶたがきられた。激戦がつづき、明治三八年一月の旅順の陥落、三月の奉天会戦、五月の日本海海戦によって日本軍は勝利を収めた。アメリカの調停によって日露の講和条約が調印されたのは明治三八年九月五日である。そして日露戦争は、日本の資本主義を飛躍的に発展させることになった。

文化の近代化も進行した。まず欧米の近代的科学の方法と精神を学ぶことによって、明治以降の日本のあらゆる分野の科学の体系が整っていった。文学の分野では、写実的

◆義和団

白蓮教びくれんの支流で、清末期に勢いを得た義和拳教ぎわけんを信奉する秘密結社。反キリスト教の立場から排外運動を進め、一八九九年に蜂起、北清事変（義和団の乱）を起こした。拳匪けんひといわれた。

な手法で自然主義を志向した二葉亭四迷や、彼とともに口語による小説を試み、言文一致の新しい表現方式を用いた山田美妙、さらには尾崎紅葉、樋口一葉、坪内逍遙などが、新たな文学の世界を切り拓いた。

演劇・美術・音楽の分野でも近代化が進み、明治二二年に歌舞伎座、明治二六年には明治座が新築された。オペケベ節で有名な川上音二郎が新しい演劇を生み出し、新派と呼ばれたのも明治三〇年代である。日本はまさに一大変革の渦のなかにあった。

II 明治時代の人見とその周辺

(1) 明治前半の主な動き

明治新政府にとって、新体制のもとで旧藩主をいかに遇するか、大いに頭を悩ましたところであったろう。そこで当初は、地方を府、県、藩の三種に分け、旧幕領の府県には知事を置き、藩は旧のまま藩主に一任した。人見は、安房上総知県事の所管となり、久留米藩士柴山典が知県事となった。

しかし、明治二年一月の版籍奉還に伴って、二月、宮谷県みやざくが設置され、同県の所管へと指定替えされた。そして、初代の権知事には知県事・柴山典が任命された。それもつかの間、明治四年七月には廃藩置県が実施され、当初、上総・安房地方には一六の県が設けられたが、一月、宮谷県は廃止され、管轄が木更津県と新治県に分割された。人見は木更津県に属することになった。そしてさらに、明治六年六月、木更津県と印旛県が合併して、千葉県が設置されるにおよび、同県の所轄になった。

そこで明治時代における人見村を中心とした周辺地区の動きや、変化を追ってみると、明治三年に人見村で大火が発生し、民家九、寺院二を焼失している。

明治五年（一八七二）には郵便取扱所として木更津局が開局し、明治六年には郵便料の全国統一ならびに郵便ハガキが発行されている。

明治五年の学制制定および学区制の施行に伴って、中野尋常小学校が開校したのは明治六年、翌七月一月には人見の薬師堂に人見校が設置されている。長福寺に坂田尋常小学校が置かれたのも同年五月である。またこの年、高橋亀吉が人見川で渡船を開業している。

明治一〇年に起こった西南の役を平定した維新政府は、その後、国家体制を固め、明治一一年に府県制を改革している。つまり、県制の下に郡制を敷き、郡区町村編成に着手し、統一行政の組織化を図った。『君津町誌』（前編）によると、

「明治一一年一月、望陀、周准、天羽の三郡を以って一劃とし、郡役所を木更津村に置き、望陀、周准、天羽郡役所といい、郡長之を管した。初代郡長・板倉胤臣、二代・平山晋であった。郡内を三大区に分ち、望陀郡が第一大区と第二大区、周准、天羽両郡が三大区となった。そして其下を小区に分った」とある。明治一一年には人見・畑沢・坂田校が合併し、明治一四年には人見村会規則が制定されている。規則は三章三〇条からなっている。（五一三ページ参照）

また、富国強兵を国策とする明治政府は、明治六年、徴兵令を發布した。そして、この徴兵制度の確立をふまえて、明治二年、地方自治の改革に着手した。同年四月、市制および町村制を公布するとともに、六月には町村合併の訓令を発令した。

これにもとづいて、人見村も明治二二年四月、隣接する大和田、坂田、中野、久保、台の村々と合併し、「周西村」が誕生した。八重原村、周南村、貞元村ができたのもこのときである。各村とも村役場をおき、新しい制度による村会議員選挙が行なわれた。

この議員の選挙は、法律で定められた等級選挙であった。すなわち満二五歳以上の男子で、二年以上その町村の住民であり、しかもその町村で地租あるいは直接国税を二円以上納めた、いわゆる「町村公民」に被選挙権は限定されていた。議会議員も納税額によって一・二級に分かれ、任期は六年で、三年ごとに半数が改選される仕組であった。

そして、町村長は議会が選挙を行ない、県知事の認可を受けた。当時の議員は、いわば名誉職で無給を原則としたほか、町村会議長は町村長が兼ねた。この制度は大正一五年六月の市制町村制の改正まで続いた。なお、このとき納税額によって一票の重みに差をつけた等級選挙が廃止され、平等選挙に改められた。

周西村の初代村長は坂井四郎治、助役に磯貝紋平が選出された。村役場は、坂田八五八番地にある初津正之助家の一部を借りてスタートした。初津家は江戸時代に周西地区を知行した旗本・小笠原氏の分家として初津姓を名乗ったといわれている。その後、新庁舎が、坂田の水越清の水田を埋め立てて建築され、昭和七年三月移転した。この役場は昭和一八年四月の君津町誕生まで続いた。また、明治二二年の市町村制に伴って区長制度も施行され、人見の初代区長に高橋藤吉郎が選出されている。

◆町村合併

町村の合併は明治初年以來行なわれていたが、国の政策としては二回、大規模に実施された。明治二二年に市制・町村制の実施に備えて強行され、約七万の町村がその三分の一の二五〇〇〇余に減少した。このとき、人見村は大和田・坂田など五ヵ村と合併して、新たに周西村となっている。

もう一回は昭和二八年一〇月から実施された町村合併促進法に基づいて実施された。同法によって、当地域では二九年三月、君津町と貞元・周南村の一町二村が合併している。なお、周西・八重原の両村が合併し、君津町が誕生したのは昭和一八年四月である。

◆八重原・周南・貞元村

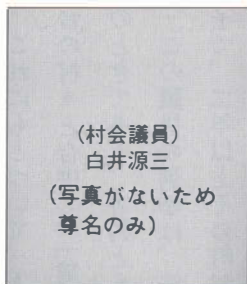
▼八重原村Ⅱ三直、内糞輪、法木作、外箕輪、李師、南子安、北子安を合併。

▼周南村Ⅱ宮下、浜子、小山野、常代、六手、尾車、大山野、作木、山高原、皿引、馬登、草牛を合併。

▼貞元村Ⅱ貞元、中富、上湯江、下湯江、小香、新御堂、杉谷、郡、八幡を合併。

人見選出の議員 明治二二年に周西村が誕生した。そして新しい制度による村会議員選挙が行なわれたが、以来、人見から選出され

た議員を列記すると左記のとおりである。(五二一ページ参照)



(村会議員)
白井源三
(写真がないため
尊名のみ)



(村会議員)
守 岩男



(村会議員)
高橋藤吉郎



(村会議員)
守 太助



(村会議員)
白井吉蔵



(村会議員)
守 民蔵



(村会・町会議員)
守 廣治



(村会議員)
高橋 誠



(村会議員)
守 吉司



(町会議員)
大森 辰蔵



(町会議員)
白井 保



(村会議員)
守 彰三



(町会議員)
秋元国次郎



(町会議員)
守 彰三



(町会議員)
白井助次郎



(市会議員)
高橋 敏男



(市会議員)
白井千代吉



(町会・市会議員)
鳥居 武



(市会議員)
守 清次郎

■歴代周西村村長（明治22年5月～昭和18年3月）

就任年月日	氏名	出身地	就任年月日	氏名	出身地
明治22.5.11	坂井 四郎治	坂田	大正12.3.1	水越 福太郎	坂田
明治26.12.21	金田 盈蔵	久保	大正13.12.4	天笠 作十郎	人見
明治27.11.9	坂井 四郎治	坂田	昭和2.2.7	鈴木 吉兵衛	中野
明治28.5.29	鈴木 吉兵衛	中野	昭和2.8.17	鈴木 吉兵衛	中野
明治31.10.20	高橋 安太郎	中野	昭和3.3.18	茂田 捧太郎	大和田
明治32.3.23	坂井 四郎治	坂田	昭和4.4.9	榎本 竹次郎	中野
明治33.5.30	金田 盈蔵	久保	昭和5.5.14	榎本 竹次郎	中野
明治34.4.20	守田 八郎治	久保	昭和6.2.6	坂本 藤右衛門	中野
明治36.3.18	大野 甚太郎	人見	昭和7.1.4	榎本 政吉	人見
明治40.4.12	大野 甚太郎	人見	昭和9.5.18	能重 房次郎	人見
明治44.4.18	保坂 亀次郎	久保	昭和9.5.21	守重 房次郎	人見
大正4.4.19	坂井 四郎治	坂田	昭和13.7.20	坂井 四郎治	坂田
大正8.4.17	榎本 竹次郎	中野	昭和14.5.1	保坂 亀次郎	坂田

(2) 明治後半の主な動き

明治二七年の日清戦争勃発に伴って、当君津地区からも多数の人が出征したと思われるが、残念ながら確かな資料は残っていない。『君津町誌』、その他の調査によると、人見から白井為吉、守長吉が出征している。なお、白井為吉は明治三五年六月二一日、横須賀海軍病院で戦病死している。海軍二等水兵、享年二四歳。

また、二七年は大変な早魃だったらしく、人見字堰下地先の小糸川に土俵堰止めの水車が新設されている。このときの農家は六六戸、水田二八町歩とある。消防組規則が公

◆歴代周西村助役

就任年月日	氏名
明治22.5.11	磯貝 紋平
明治26.9.6	茂田 治郎
明治28.8.30	中野 金治
明治31.4.4	大野 甚太郎
明治33.4.20	青澤 吉弥
明治36.4.20	保坂 次郎
明治40.5.28	坂井 四郎治
明治44.7.15	守田 次郎
大正4.7.21	榎本 竹次郎
大正5.11.8	佐野 清太郎
大正7.11.25	守田 太助
大正8.11.30	水越 太助
大正11.8.22	天笠 十郎
大正12.3.14	茂田 捧太郎
昭和3.11.8	守田 治郎
昭和5.6.18	坂本 藤右衛門
昭和7.1.14	岡崎 彦次郎
昭和10.1.5	保坂 常次郎
昭和13.3.8	平野 仁三郎

布されたのもこの年であり、一二月には東京本所と市川間に鉄道が開通している。

明治二九年、新田をめぐって人見村と大堀村の間で争いが起こっている。この争いは、その後数年に及ぶほど難航している。

三一年四月、郡名および郡の区画変更が行なわれ、望陀・周准・天羽の三郡が合併して君津郡が誕生した。同年六月には中野・坂田の両校が合併し、周西尋常小学校としてスタートしている。同校はこの年七月、高等科を設置して、名称も周西尋常高等小学校に変わっている。翌三二年三月、第一回卒業生が学窓を巣立ったが、卒業者数は尋常科三六名、高等科二名であった。

明治三五年は、四月に馬込揚水車が完成している。二〇町四段二四歩の水田を対象に灌漑用として設置されたこの水車は、その後、順調に稼働し、農事に大きく貢献している。三六年には郡会議員選挙が行なわれ、人見から天笠博吉が選出されている。

明治三七年二月に起こった日露戦争は、わが国をアジアにおける新興国家として世界に認めさせ、列強の一員として国際舞台へ登場させる契機となった。だが、その犠牲も多大であった。周西村からは四一名が従軍している。人見からは次の一一名が出征し、うち三名が戦死または戦病死している。

【従軍者】

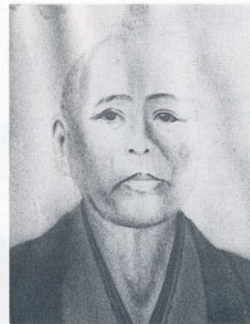
守長吉、宮崎長吉、守保治、斉藤政五郎、白井庄兵衛、高浦惣八、佐野兼吉、白井三次郎、守常吉、守平蔵、宮崎由太郎

【戦死者】

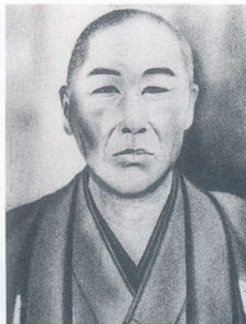
守 保治……第七師団歩兵第二六聯隊。一等兵。明治三七年一月三〇日、旅順口赤坂

人見の歴代自治会長

最初区長といい、連絡員という呼称で呼ばれた時代もあった。当ページより一三四ページまで掲載。なお、写真のない人は名前だけ掲載させてもらった。



高橋 藤吉郎



石井源三郎



守 岩男

守 馬吉

山の戦闘で壮烈な戦死。享年二二歳。勲八等功七級。

宮崎長吉……近衛後備歩兵第四聯隊。伍長。明治三八年五月一二日東京予備病院で病死。享年三〇歳。勲七等。

守 長吉……第一師団歩兵第二聯隊。上等兵。明治三八年三月二一日、奉天付近田義屯の戦闘で負傷。同月二一日、第一師団第二野戦病院で歿す。享年三五歳。勲七等功七級。

明治四〇年には、失火により青蓮寺が全焼し、まもなく仮本堂が建てられた。

明治四二年五月、下新川田に揚水車が設置された。水田三町五反四畝二歩を対象としたもので、三七〇円の費用を投じて完成した。さらに四三年には一、九四〇円をかけて堰下の水車が改良されている。

また、明治四三年八月、当地方は未曾有の豪雨に襲われ、周辺地域のあちこちで大被害が出たが、人見でも青蓮寺の裏山が崩壊し、仮本堂が倒壊している。その後、ときの住職小柴真海師や檀家の努力で、本堂が再建されたのは大正元年一二月である。

一方、四三年には人見信用組合が設立されている。組合長に天笠作十郎が就任し、組合員は一六五名となっている。四四年には周西村青年団が結成されている。蘇我く木更津間に鉄道が開通したのが同年八月、四五年には木更津く久留里間に軽便鉄道が完成している。



守 民蔵



鳥居源太郎



高浦 吉蔵

白井 源三

第三節 第一次大戦と日本

I 第一次大戦と産業・文化の発展

明治四五年（一九一二）七月三〇日、明治天皇が崩じて、皇太子嘉仁親王（よしの）が天皇となり、年号も大正と改められた。そして大正三年（一九一四）には第一次世界大戦が勃発した。

その引き金となったのは、大正三年六月、ボスニア（現在のユーゴスラビアの北部）の首都サライエボで、オーストリアハングリー帝国の皇太子が、セルビアの一青年に暗殺された事件であった。

当時、ヨーロッパは、ドイツを盟主とするオーストリアおよびイタリアの三国同盟、他方ではイギリスを中心としたフランス・ロシアの三国協商があり、その対立は局地的な戦争に発展していた。そこに起こった暗殺事件は、オーストリアハングリーとセルビアの戦争となり、八月一日にはドイツがロシアへ宣戦を布告、さらにドイツは八月三日、フランスへの宣戦を行なった。ついで永世中立を宣言していたベルギーへのドイツ進撃は、イギリスの対独宣戦（八月四日）のきっかけとなって、世界大戦へ発展した。この大戦の特徴は、列強が世界の再分割をめざした露骨な帝国主義戦争であったことだろう。日英同盟を結んでいた日本も八月二三日、ドイツに宣戦布告することになる。



白井 吉蔵



守 吉司



守 太助

石井伊之助

世界大戦が始まったところ、日本は不景気のどん底にあった。しかし、この大戦を契機に日本経済は立ち直りをみせ、重工業・化学工業を中心とする産業の発展はめざましいものがあつた。ちなみに大正三年の会社総数は一万六、八〇〇余社、それが大正七年には二万三、〇〇〇余社、大正九年には三万社を数えている。そして、大戦の後半期には、都市や農村で巨富をえた一部の人々が続出し、いわゆる成り金時代を現出した。第一次大戦は、大正七年一月一〇日ドイツ帝制が打倒され、翌一日、共和国ドイツが連合国に降伏したことによって四年余の戦いを終結した。大正八年一月、パリで講和会議が開かれ、六月、ヴェルサイユで講和条約が結ばれた。

一方、ロシアでも革命が起こり、ロマノフ王朝が倒れ、大正七年二月、レーニン等によるソビエト政府が樹立した。世にいう一〇月革命（十一月革命ともいう）であるが、これは単に連合国の一角が崩れたという意味だけでなく、帝国主義戦争を根本的に批判する社会主義勢力が政権を握る国家を作ったことで、国際政治のあり方を変えることにもなった。

その第一は、地球の六分の一の地域に社会主義国家が生まれたこと。第二は、民族独立運動がこれまでにない規模で進展したこと。第三は、資本主義固有の矛盾が深刻化したこと、であらう。

こうした世界情勢の変化のなかで、わが国でも政治上・思想上の変化が顕著であつた。自主主義・民主主義の勢力がしだいに発展してきたのである。

大正デモクラシーといわれるこれらの思想は、文学や演劇、美術などにも大きな影響を与えた。文学では島崎藤村、田山花袋、夏目漱石、森鷗外、さらには志賀直哉、武者



白井助次郎



高橋精三郎



守 治助

小路実篤こうじ さねあつ、石川啄木などが、それぞれのジャンルで新しい分野を切り拓いた。演劇では、歌舞伎や新派とは違った近代劇（新劇）が成立した。また、美術界では二科会にしかが発足し、日本の油絵の頂点を作った。

大正時代は、明治維新以後の歴史のなかで、思想的に最も自由な時代であり、政治的にも民主的活力が高まった時代であったといえよう。

II 大正時代の人見とその周辺

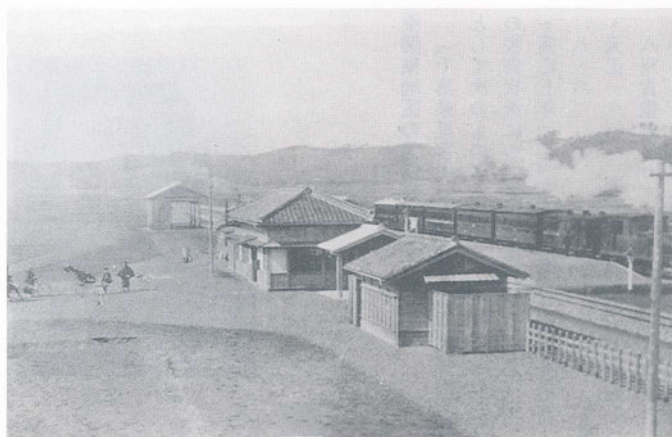
大正二年六月、大原と勝浦間に鉄道が開通している。翌三年には青蓮寺境内に近江屋甚兵衛を顕彰する碑が建立された。また同年八月、日本は第一次世界大戦に参戦し、人見から守文七が出兵している。

大正四年一月には、木更津と上総湊間に鉄道が開通し、周西駅が誕生している。四月には周西実業補習学校が創設され、堰下の水車が藤原式に改良されたほか、君津電灯株式会社が設立されたのもこの年である。

大正五年二月には、周西村消防組が発足している。本部のほか第一部から第六部までの編成で、人見消防組は「周西村消防第三部」に属している。

大正七年三月、さきに設立された君津電灯株式会社が、小規模ながら送電を開始し、五月には周西補習学校の校舎が建設されている。また大正六年のロシア革命に伴って、人見から白井久三郎が出兵している。

大正一二年の関東大震災は、人見地区にも多大な被害をもたらした。



大正14年ごろの周西駅



高橋 誠

午前一時五八分、突然に襲ったこの大地震は、東京・千葉・神奈川の各府県を中心に、関東地方全域と静岡・山梨両県の一部に大きな災害をもたらした。マグネチュード七・九といわれる大地震の全国被害は、全壊全焼家屋五七万五、三九四戸、半壊半焼家屋一二万六、二三三戸、死者九万一、三四四名、行方不明一万三、二七五名、被害総額は当時の額で五五〇六五億円といわれている。

一方、旧周西村の被害状況は、死亡二人、負傷者七名で、人的被害はさほどではないが、全壊した住家九〇戸、半壊五一戸、学校二校が全壊したほか、人見神社全壊、青蓮寺大破、その他にも甚大な被害をこうむっている。なかでも人見山の崩壊は、小糸川の流水を寸前で止める急迫した状態となり、青年団、消防組員、在郷軍人などの労働奉仕による応急処置が行なわれた。警備に軍隊も出動したとある。この年、周西村婦人会、周西村処女会が結成されているが、処女会とはいかにもういういしい名称である。

大正一三年、人見耕地整理組合が堰下と馬込に分離している。水田は堰下耕地整理組合三〇町五反七畝九歩、馬込耕地整理組合が一九町七反一畝二一歩となっている。大正一四年には水車が石油発動機による揚水機に改良されており、時代はいよいよ昭和へと変わっていく。



守 廣治

◆関東地区の大震災

『千葉県災害史』によれば関東地区の大震災として次のものがあげられる。ただし人見地区の被害状況については残されたものがない。

- ・明応七年(一四九八)房総半島沖海底地震(M八・六)
- ・天正一八年(一五九〇)震源地の記載無し(関八州古戦録より)
- ・慶長九年(一六〇四)房総沖東方(M七・九)
- ・延宝五年(一六七七)房総沖(M七・四)
- ・元禄一六年(一七〇三)野島崎南方沖(M八・二)
- ・宝永四年(一七〇七)富士山噴火
- ・嘉永六年(一八五三)関東大地震南海道沖(M八・〇)
- ・安政二年(一八五五)江戸直下型大地震(M八・〇)

第四節 第二次世界大戦と日本

I 軍事国家への傾斜

(1) 軍部の政治に対する支配力向上

大正一五年一二月二五日、大正天皇が崩じ、攝政の地位にあつた皇太子裕仁親王ひろひとが即位した。年号は「昭和」と改められた。書経きよてんの堯典ぎょうてんにある「百姓昭明万邦協和」からとられたこの昭和は、文字どおり明るさと世界平和を願ったものだが、少なくとも昭和二〇年の第二次世界大戦終結までは、軍事国家体制への傾斜を高め、戦争を拡大する皮肉な結果となった。

ところで昭和初期に話を戻すと、第一次世界大戦後の経済不安のなかで、ときの浜口内閣は、内には緊縮財政、外には協調外交路線をとった。いわゆる緊縮財政を実現するため、財政支出を減らし、産業の合理化を進め、そのうえ金輸出解禁を行なって国際市場へ進出しようとした。しかし、緊縮も合理化も、結局は一般国民や労働者にしわ寄せされ、さらに昭和五年一月の金解禁も吹き荒れる世界大恐慌のなかで、その嵐の渦にまきこまれてしまう結果となった。

この恐慌を切り抜けるため、大資本はカルテルを結成し、生産協定や操業短縮で利益を護ろうとし、カルテルの進展とともにトラスト（企業合同）を行なった。大銀行の指



白井 保

◆カルテル

企業連合。同種の企業がそれぞれ独立性を保ちながら連合して、商品の価格・生産量などについてさまざまな協約を結び、市場の統制をねらう独占の形態。

◆トラスト

企業合同。同一産業部門において、数個の企業が資本の集中・集積によって競争を排除し、超過利潤を獲得しようとして結合すること。カルテルよりもさらに強く、コンツェルンに次ぐ独占形態。わが国では独占禁止法によって禁止されている。

導のもとに行なわれたカルテル・トラストは、財閥の産業支配をいちだんと進め、コンツェルンの形成を促進した。そして中国市場の確保がさらに重要となった。

一方、昭和五年一月、ロンドンで開かれた日・英・米・仏・伊による海軍軍縮会議では、日本の意見が押さえられ、政府はやむなく妥協して条約に調印した。が、これを不服とする軍部は強く反発し、軍部や右翼による軍国主義をあおりたてる絶好の機会となった。

そして、昭和六年九月一八日、奉天北郊の柳条溝で起こった満鉄線路の爆破による満州事変、昭和七年一月の上海事変。昭和十一年二月二六日、国内で起こったいわゆる2・26事件など、軍部の政治に対する支配力は高まり、戦争への道をまっしぐらに進んでいくことになる。満洲事変には人見の守善太郎が従軍している。

(2) 支那事変の勃発

昭和七年七月七日、北京郊外の蘆溝橋で起こった日中両軍の衝突は、やがて全面戦争へ発展、支那事変となった。この日中戦争の拡大とともに、わが国の戦争体制はいちだんと整備、強化されていった。

昭和十二年六月、組閣した近衛内閣は、一〇月、軍機保護法を制定、一三年には「隣組制度」が設けられた。そして一三年三月には国家総動員法が議會を通過した。これは戦時統制法の集大成ともいべきもので、労務・物資・資金・物価・施設などの経済面をはじめ、国民生活のあらゆる部門が、政府の絶大な権限下に置かれることになった。

一方、日中戦争が長期化しているとき、ヨーロッパにも戦争の危機が濃くなった。昭和十三年、ドイツはオーストリアを併合し、一四年にはチェコスロバキアを併合。イタ

●ロンドン軍縮会議

昭和五年（一九三〇）に米・英・日・仏・伊が参加して、ワシントン軍縮条約の延期と日・米・英の補助艦の保有量を協定した会議。日本の補助艦制限は対アメリカ六九・七％、重巡洋艦六〇％、潜水艦保有量五万二、七〇〇トン（アメリカと同量）で妥結した。



白井久三郎



高浦寅吉

リアもアルバニアを占領した。さらにドイツは、一四年九月一日、ポーランドに侵入を開始し、同月三日、ポーランドと同盟していた英・仏に宣戦を布告。第二次世界大戦がはじまった。

そのころのわが国は、日中戦争の長期化に伴って、戦争経済の矛盾が各方面で深刻となり、とくに資源確保を求めている南進論が活発となった。昭和一五年一月、海軍大將^大内光政^{なみつまさ}が組閣し、さらに同年七月、米内内閣に代わって第二次近衛内閣が発足した。その七月二八日、日本軍は南部仏印へ進駐した。米・英・蘭はただちにその領土内の日本人資産を凍結し、アメリカは八月一日、石油をはじめとする重要軍需物資いっさいの対日輸出を禁止した。かかる事態のなかで近衛内閣は、同年九月、日・独・伊三国同盟を締結したが、これは事実上、太平洋戦争への道を示唆するものであった。

(3) 太平洋戦争の勃発と敗戦

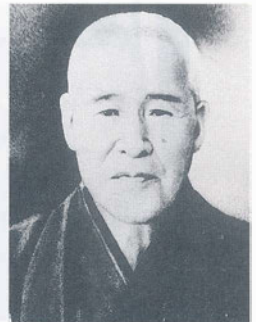
昭和一六年一〇月、第三次近衛内閣に代わって、陸相東条英機を首班とする内閣が誕生した。事態はまさに開戦を時間の問題とする危険な状態にあった。そして一二月八日未明、日本海軍は航空機と特殊潜航艇でハワイ真珠湾のアメリカ太平洋艦隊に奇襲を加え、日本はついに大戦争に突入した。政府はこれを「大東亜戦争^{だいとうあ}」と呼んだ。

緒戦の戦果は、予期以上に圧倒的なものであった。しかし、昭和一七年六月のミッドウェー海戦を契機に、戦局はしだいに米・英・中・蘭など連合軍に有利に展開し、ドイツもまた対ソ連の全戦線で敗退を余儀なくされていた。

そして昭和二〇年五月七日、ドイツの無条件降伏は日本を孤立に追い込み、八月六日には広島に原子爆弾が投下された。さらに九日にはソ連が参戦、同日、長崎に二発目の



周西村の出征兵士＝昭和12年



守 龜吉

原子爆弾が投下された。大戦による国土の荒廃は著しく、国民もまた極限状態のなかにあった。八月一五日、ポツダム宣言受諾の玉音放送がされ、ここに太平洋戦争は終結した。連合国最高司令官・アメリカ極東総司令官マッカーサー元帥が日本本土に到着したのは八月三〇日。九月二日にはアメリカ軍艦ミズーリ号上で、連合国に対する無条件降伏の調印式が行なわれた。ここに天皇および日本政府の統治権は、連合国最高司令官に從属させられ、日本は占領下に置かれることとなった。言いかえれば悪夢のような軍国主義時代との訣別を意味するものであった。

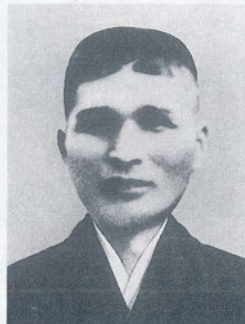
なお、満洲事変、支那事変さらには太平洋戦争へ從軍した人見の戦士と戦死者は次のとおり。

【從軍者】

高橋 定次郎	秋元 秋蔵	白井 惣吉	白井 善吉
守 平次郎	守 亀吉	石井 国村	高橋 久五郎
宮崎 友治郎	守 要次郎	守 久七	白井 平蔵
守 照将	守 樋次郎	白井 千代吉	宮崎 栄次郎
宮崎 政吉	高橋 惣吉	宮崎 甚蔵	鳥居 吉次郎
守 米吉	守 松治郎	石井 要蔵	石井 好雄
高浦 惣四郎	佐野 多助	細谷 三郎	宮崎 春吉
守 謙司	守 久良三	秋元 勝治	守 善太郎
佐野 勝一	白井 由蔵	高橋 市太郎	鈴木 仁三郎
守 正治	細谷 金治	守 好明	高浦 幸吉



秋元 源蔵

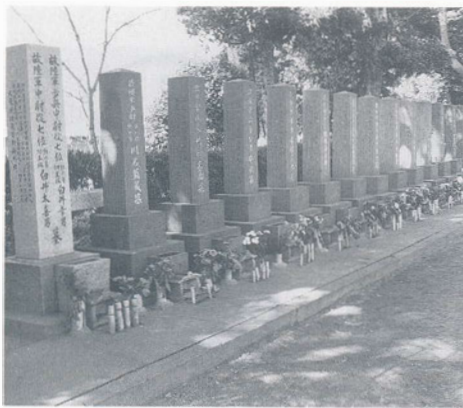


守 照将

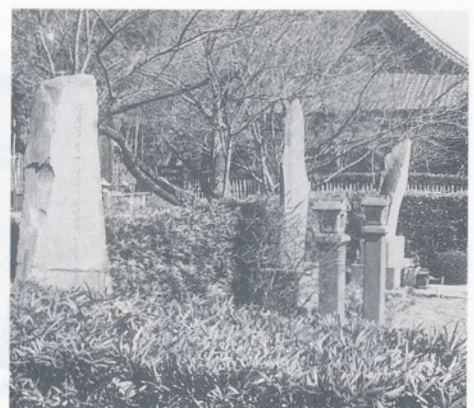


高橋 太吉

白井久	宮崎貢	守 桑吉	守 甚太郎	金子太郎	高橋清次郎	秋元清	宮崎武雄	高橋千代吉	高橋清	白井吉男	白井勝男	大森利雄	秋元治郎助	高橋敏男	秋元仲	高橋勉	守 恭司	高橋喜一	守 重雄
守 公一	秋元久治	秋元重雄	守 正義	宮崎喜久雄	白井三佐男	金子義雄	宮崎弘	高橋務	白井仲	秋元仁三郎	戸貝敏	守 国治	石井一	鈴木仙蔵	守 良治	石井伊之吉	宮崎宗一	鶴岡源五郎	守 勇
守 武	高橋幸二	守 廣治	高橋与惣五郎	高橋金治	白井芳雄	守 喜一	白井富蔵	村田元吉	石井政二	白井民三	村田源造	高橋吉蔵	高橋秋蔵	高橋定治	守 義雄	秋元政吉	石井金二	村田菊蔵	守 一郎
高橋操	宮崎正雄	秋元寅吉	秋元康太郎	佐野茂雄	大森功	高橋政蔵	白井要治	白井大喜男	前畑文治	高橋正	守 権三	白井善三郎	白井弁蔵	秋元喜知	守 晴	高橋新太郎	茂田常雄	白井幸男	守 作司



戦没者の墓=青蓮寺



戦没者の墓=青蓮寺

【戦死者】

戦死者氏名	階級	死没年月日	享年	死没区分	戦没場所
守 善太郎	陸軍 曹長	昭一〇・四・三〇	二八歳	公務死	朝鮮にて
白井 幸男	陸軍 中尉	昭一三・一・二九	二一歳	戦死	支那山西省靈石縣陶山村附近
高浦 幸吉	陸軍 上尉	昭一九・二・一八	三四歳	戦死	ニューギニア方面
大森 利雄	陸軍 兵	昭一九・四・二五	二五歳	戦死	東部ニューギニアウエワク方面
秋元仁三郎	海軍 兵	昭一九・六・一九	二三歳	戦死	中部太平洋方面
石井 政二	陸軍 兵	昭一九・七・二〇	二三歳	戦死	中華民国湖南省平江縣新市第一軍予備病院
村田 菊蔵	陸軍 曹長	昭一九・八・二一	二九歳	戦死	ニューギニヤマルチップ方面
佐野 勝一	陸軍 一等兵	昭一九・九・八	三八歳	戦病死	漢口第一陸軍病院
鶴岡源五郎	陸軍 兵	昭一九・一〇・一八	三三歳	戦病死	中華民国無錫第一七〇兵站病院
石井 一	陸軍 伍長	昭一九・一一・一八	二五歳	戦死	比島レイテ島リモン西方
秋元治郎助	陸軍 伍長	昭一九・一一・一五	二六歳	戦死	レイテ島リモン
白井太喜男	陸軍 中尉	昭一九・一二・一八	二二歳	戦死	比島シンドロサンホセ沖方面
守 重男	陸軍 兵	昭二〇・一・三〇	三六歳	戦死	ニューギニヤモンユール方面
守 武	陸軍 曹長	昭二〇・五・一〇	一七歳	戦死	ルソン島ウミライ
白井 民三	海軍 曹長	昭二〇・五・一五	二五歳	戦死	比島サンボアンガ
守 権三	陸軍 兵	昭二〇・六・二〇	二六歳	戦死	沖繩群島
村田 元吉	陸軍 兵	昭二〇・七・一	二三歳	戦死	比島レイテ島カンギボット山
前畑 文治	陸軍 伍長	昭二〇・七・一	二四歳	戦死	比島レイテ島カンギボット山
石井 好雄	陸軍 兵	昭二〇・一一・四	三七歳	戦病死	中華民国湖南省

Ⅱ 終戦までの人見とその周辺

昭和四年、房総を循環する鉄道が完成、交通はますます便利になった。七年には、周西村役場が坂田七三七番地に新築され、移転した。

そしてしだいに戦時特色を強くする国内事情のなかで、昭和九年には婦人会が国防婦人



平野久次郎



秋元国次郎



守 市太郎

会に改組され、一二年には木更津に海軍航空隊が設置された。小糸川の馬込地先に可動式潮止め堰施設が完成したのは一三年。しかし同堰は昭和二〇年八月の大洪水で基礎から破壊され、再建されることになる。

一四年に入ると、消防団も警防団に改組され、国家総動員法の公布とあいまって戦時色はいちだんと強化された。銅や鉄製品が回収され、軍事資材として活用されはじめたのもこのころからである。なお青蓮寺の梵鐘も昭和一九年ごろ、軍の命令によって供出させられている。

一六年には、国民学校令によって周西尋常高等小学校が周西国民学校に改称されたほか、陸統と若者たちが戦場へかり出されたこともあって、青年団が解散している。木更津第二海軍航空廠が設立され、八重原に工場ができたのもこの年。これを一つの契機として、一八年には八重原と周西の両村が合併し、君津町が誕生している。

終戦の昭和二〇年には、前述したとおり小糸川の潮止堰が大洪水で破壊され、また、空襲による被害も出ている。七月には千葉市が大空襲を受け、わが国は焦土のなかで、歴史の流れを変えようとしていた。



高橋喜三郎



守 彰三



守 米吉

第五節 戦後の日本と経済発展

I 経済回復と高度成長

戦後の昭和二〇年代後半は、日本経済にとって、「復興」と「安定」と「自立」のための苦闘の歴史であった。インフレの抑制、アメリカの援助にすぎらない自立経済の確立をその課題とした。ところが予想だにできなかった朝鮮動乱の特需ブームを背景に、国内の投資景気や消費景気が高まり、産業界を含めて日本経済は活力を回復した。

三〇年代を一口で表現すると、高度成長と変化の時代であり、開放経済体制へ大きく移行する年代であった。昭和三〇年から三一年にかけての「神武景気」、三四年から三五年にかけての「岩戸景気」は、技術革新を原動力とした企業の伸長と、大衆消費社会を出現した。

その消費構造の変化は、工業品による生活の高度化であり、特に家庭電器を中心とした耐久消費材の伸びが著しかった。三二年から白黒テレビをはじめ、電気洗濯機、電気冷蔵庫などのいわゆる「三種の神器」を中心とする電化ブームが起こり、カメラ、ミシンなども一段と普及率を高めた。「消費は美德」「消費者は王様」といわれる時代であった。

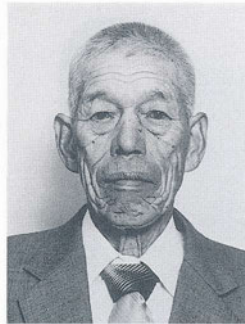
とくに昭和三五年には、ときの宰相池田勇人が所得倍増政策を発表、バラ色のソフト



白井 吉男



秋元 伸



白井 由蔵

ムードをふりまいた。この所得倍増計画は、一〇カ年以内に実質国民総生産の規模を倍増するというもので、国民にも明るい希望をもたせた。事実、わが国の経済は、産業社会の発展を基盤として驚異的な経済成長をとげることになる。

昭和三十九年一〇月には、東京―大阪間を四時間一〇分で走る東海道新幹線が開通し、一〇月一〇日からは日本で初めてのオリンピックが東京代々木の会場で二週間にわたって開催された。そして昭和四二年には、GNPでアメリカにつぐ世界第二位の経済大国に成長したのである。もちろんその経済成長の間には、幾度かの不況を経験しているが、いわばそれは景気の波間に属するもので、昭和四〇年の不況のあとには、カー、クーラー、カラーテレビの「新三種の神器」に象徴される「イザナギ景気」を迎えることになる。

また、昭和四四年七月二〇日には、アメリカの宇宙船アポロー一号が人類初の月面着陸に成功。宇宙時代の幕開きを示すものであった。

ともかく、戦後の復興期から奇跡的な回復をとげ、世界からも驚異とみられる経済成長をとげた日本だが、昭和四八年一〇月の第四次中東戦争を契機としたオイルショックで、事態は一変した。石油価格高騰に起因した物価上昇が連鎖的に広がるとともに、深刻な不況をもたらすこととなった。これは世界的な傾向で、世界同時不況のなかで日本経済もその進路を変更せざるを得なくなった。

消費を美德とする風潮が見直され、重工業を中心とする工業社会への反省と脱皮が行った。いわゆる高度成長から低成長経済への移行のなかで、産業構造も急速に転換していくことになる。

昭和五三年一二月の第二次石油危機を比較的上手に乗りきった日本だが、しかし、そ



高橋 秋蔵

◆東京オリンピック

東京で開催された第一八回オリンピック大会。期間は昭和三十九年一〇月一〇日から二四日まで。九四カ国約五、五〇〇人の選手が参加し、実施種目は二〇競技。

日本は体操、レスリング、柔道、ボクシング、女子バレーなどで合計一六個の金メダルを獲得した。

◆人類初の月面着陸

一九六九年七月二〇日午後四時一七分四二秒（米東部夏時間）、アポロー二号のアームストロング船長とオルドリン飛行士は、月の「静かの海」への着陸に成功。人類初の足跡を月面上に印した。

の一方では貿易摩擦が顕在化し、最近では急激かつ大幅な円高に呻吟しているのが日本経済の現状といえよう。世界はまさに変化と不透明のさなかにあり、そのなかで日本経済がどのように対応していくか、大きく注目される場所である。これはまさしく日本の将来と大きくかかわっている問題といえよう。

Ⅱ 戦後の人見とその周辺

昭和二〇年の八月、大雨に見舞われた小糸川が氾濫し、人見の橋梁と潮止堰が破壊する災害があった。敗戦と天災のダブルジチに人見地区の人たちは意気消沈した。それは全国的に共通した現象だったといえるが、荒廃と混乱は、また新たな出発点でもあったといえよう。

昭和二一年には、戦場から帰還した若者たちによって青年団分団が発足し、石油発動機の揚水も電動式に切り替えられた。二二年四月には戦後初の市町村長の選挙が実施され、君津町長に鈴木誠一が選ばれた。また同じ四月には学制改革によって六・三制が施行され、周西尋常高等小学校が周西小学校に改称、このとき高等科は廃止されている。また君津中学校が新たに開校し、九月には君津町消防団が発足している。一三年には、人見から君津町農業協同組合の理事に大森辰蔵、監事に伊川源蔵が選ばれ、戦後農業の復活に寄与した。この年、周西小学校PTAが発足している。

あけて二四年七月には、君津町漁業会が発展的に解散、君津漁業協同組合（人見・和田）、坂田漁業協同組合となって新しいスタートをきった。なお、五月に工費二五〇



石井 正次



秋元康太郎



守 久治

万円で周西橋が竣工している。

二五年には、区長制が実施され、破壊した小糸川潮止堰の再建が五月着工、一二月完成という工期で一、三五〇万円をかけて行なわれている。二六年は珍しい大雪が降り、海苔の収穫が大きな痛手を受けた。さらに東京湾の富津岬から神奈川旗山崎にかけて進駐軍の防潜網が敷設され、漁業関係者は少なからず影響を受けることになった。

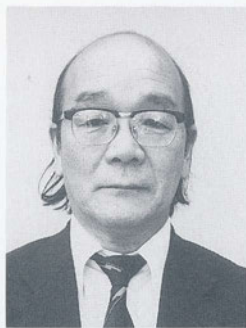
人見と神門の消防団が独立したのはこの年。人見は第一分団、神門は第一二分団に属して地域防災に貢献することとなった。同年、中橋と人見橋も竣工した。また、二六年七月、県は「千葉県総合開発計画」を発表。二七年には千葉県の「企業誘致条例」が公布されている。

二八年、海苔腐れ病が発生し、漁民は大損害を蒙った。そしてこの年の六月一七日、川崎製鐵(株)千葉製鉄所の第一高炉に火が入っている。二九年、君津町・周南村・貞元村の一町二村が合併し、新「君津町」としてスタートした。同年、人見として特記すべきことは、人見堰下護岸工事が完成したこと、海水汚染、それも油による被害で海苔の収穫が大打撃を受けたことであろう。喜ばしいこととしては近江屋甚兵衛翁の史跡が県の文化財に指定されたことがあげられる。

三一年は、二月六日に三島ダムが貯水を開始している。また四月一〇日、「周西駅」が「君津駅」に改称された。駅名改称にはいろいろと困難があったようだが、関係者や有力者の努力でその願いが実現し、現在にいたっている。近江屋甚兵衛翁の胸像が完成したのは同年四月。また、三〇年三月末に完成した小糸川河川改修工事の竣工式が、三一年四月、青蓮寺で挙行されている。



守 正義



白井千栄夫



宮崎 要策

ここで注目されることは、産業構造の近代化を図る目的で、県が実施した数々の計画であろう。川崎製鐵(株)千葉製鐵所の稼働はまさにその先駆をなしたものだが、県は三一年一二月、「千葉県産業振興三ヵ年計画」を発表した。同計画は、五井・市原・蕨・船橋地先約三、三〇五ヘクタール(約一〇〇〇万坪)の埋立てを内容としたもので、企業誘致による工業化を画策したものであった。

一方、君津町では、昭和二六年に小糸川河川改修工事の進捗状況を調査した鈴木誠一町長が、町の活性化を図る目的で、「農工商全主義」を発表。柴田知事にもその協力を要請している。この構想は小糸川の水資源を利用して工業化を図り、工業に農村の労働力を併用して町の経済力の発展を図ろうというものであった。しかし、この構想は日の目を見ることができなかった。が、君津町にこうした工業化の構想があったことは注目されよう。事実、昭和三二年二月に民間の一建設会社による埋立て騒ぎが起こっている。このため



埋立て前の人見浦=昭和38年ごろ

君津漁業協同組合では同年一二月臨時総会を開き、海面埋立てに対する協議を行なっている。

その背景には、一月に旭硝子他一七社の五井・市原地区への進出が決定し、人見地区の人たちも南下する工業化の波を切実に感じていたことが理解できる。臨時総会は、坂田をはじめ隣接する各漁業組合が埋立てに反対を表明したこともあって、君津漁業協同組合の大半がこれに同調した。だが、一部には慎重に検討する余地があるという意見もあった。そこで同組合に埋立対策委員会を設置している。

三三年は、町営の水道が敷設されるに伴って、人見水道組合が設立されている。これは、久保の浄水場より坂田、大和田と逐次、水道の敷設が進み、これに伴って人見地区も施工することになった。これまでの井戸に代って水道の敷設に踏みきった理由は、まず、将来の都市開発への対応と、さらに防火管理の向上のための消火栓設置があげられる。人見水道の単独事業として三三年一月から行なわれた工事は、地区民による一戸二万円の資金拠出と一四八万円の借入金を資金に、道路の掘削や資材の取付けなどの労力についても、区民が全面的に協力。いわば総力をあげて敷設工事が行なわれた。この結果、約三ヵ月で工事は完了し、二〇ヵ所に消火栓が設置された。三四年三月、君津町役場庁舎が完成。三五年三月には「君津町開発対策委員会」が設置されている。そして同年九月、県開発部より君津・坂田両漁業協同組合に対し、地先海面埋立ての申し入れが行なわれた。これは昭和三二年の埋立てが海面の一部に限定されたのに対し、全域にわたるもので、その反響と漁民の動搖はきわめて大きかった。



海面埋立ての調印が終わり握手する柴田知事（右）と白井千代吉組合長（左）
＝昭和36年8月10日午前11時、千葉県庁貴賓室

そして一〇月には知事より海面埋立ての正式通達が届いた。

以後、君津漁業協同組合と県との交渉が幾度となくもたれ、三六年八月、千葉県と八幡製鐵(株)において「君津町人見地先工業用地造成および分譲に関する協定」が締結されることになる。その漁業権譲渡までの経緯や動向については別項で詳述することにする。ここに近江屋甚兵衛が人見地先で開始した海苔養殖業は終止符をうち、人見ならびに君津町はその都市づくりにおいて新たな展開を迎えることになる。

そして、三七年一月、八幡製鐵(株)による人見地先海面の埋立てが開始された。海苔養殖の仕事を失った人たちは、それぞれ自分の道を求めて転業もしくは転職することになり、人見では三九年六月、いちご栽培を主体とする農芸組合が発足した。組合長には守清次郎、副組合長に高橋敏男が選任された。この年、台風で人見山が崩壊する災害があった。なお、四〇年には守勝雄が優良転業者として京葉地帯転業対策協会(会長・副知事)から表彰された。以後優良転業者として表彰を受けた人見の人たちは下段のとおりである。

四二年には、小糸川沿岸土地改良区君津第一工区として、非補助土地改良事業六〇ヘクターが着手された。春には君津製鐵所の銹鋼一貫化を志向した本格的な埋立てと、建設が開始され、その操業要員としての北九州からの移住者も大幅に増えはじめた。

四月には周西中学校が君津中学校より分立し、人見に周西幼稚園も設置された。房総西線が電化したのもこの年である。

四四年には、周西中学校と大和田小学校の校舎が完成。電話もダイヤル化された。また四五年は、房総西線の複線化が君津まで進み、土地区画整理組合連合会も発足してい

◆優良転業者

- ▼昭和四〇年 守 勝雄(新日鐵)
- ▼五三年 高浦惣四郎(高浦さつき店)
- ▼五四年 守 吉雄(新日鐵)
- ▼五五年 鳥居 武(君津運輸建設)
- ▼五六年 高橋新太郎(新平精肉店)
- ▼五七年 平野 公三(新日鐵)
- ▼五八年 佐野 一子(喫茶かずね)
- ▼五九年 大崎 金治(中華スエヒロ)
- ▼六〇年 白井 武男(新日鐵)
- ▼六一年 守 初雄(君津運輸建設)
- ▼六二年 宮崎 要策(東電不動産)
- ▼六三年 小泉多喜夫(小泉運送店)



秋元 久治



平野 公三

る。同年七月一日、集中豪雨で小糸川堤防が決壊し、人見地区をはじめ大被害を受けた。九月には、君津町、上総町、小糸町、清和村、小櫃村が合併し、新たな形での君津町がスタートした。三月には人見青年館が竣工した。

四六年九月、県下二五番目の市として君津市が誕生。初代市長に鈴木俊一が就任した。四八年に入ると、人見橋、君津新橋が開通、君津橋上駅も完成した。そして、八月一日には、人見浦開発記念碑が完成し除幕式が挙行された。このころになると人見の居住者も大幅にふえた。当時の人見地区は世帯数三五三、人口一、三四二人である。

四九年の特記事項としては、四月に堰下水利組合が解散し、同月、堰下工区碑が青蓮寺に建立されたほか、八月一七日に人見土地区画整理組合の第一回総会が開催され、いよいよ人見の区画整理事業がスタートした。中橋の改修工事も完了した。一〇月には市制施行初の市長選挙が行なわれ、鈴木俊一が再選された。そして、一二月二三日には君津市の新庁舎の起工式が行なわれた。

五〇年九月には、小選挙区制が廃止され、全市一選挙区による市議会議員選挙が行なわれ、人見から守清次郎、鳥居武が選出された。五一年七月三〇日には先に起工した新庁舎が完成。地下一階、地上一一階建ての近代的庁舎は、まさに南房総の中核都市である君津市を象徴する建物であった。

五二年、小糸川取水堰の起工式が行なわれ、同堰は五四年六月に完成した。五五年三月、君津中央公民館、周西分館が人見に設置され、五六年には、従来、漁業を営んでいた人見、神門、坂田、大和田の四地区による漁業資料保存会も創立され、蒐集した資料は、農業倉庫ならびに消防自動車機庫を改造して保存された。五七年には人見自治会会則が

◆昭和四五年の集中豪雨による君津町の被害状況

- ①罹災者 二、〇三八人（五〇一世帯）
- ②住家 全壊六戸、半壊九戸、床上浸水三〇八戸、床下浸水一五六戸
- ③非住家 全壊一戸、半壊一二戸、浸水二〇二戸
- ④農業施設
（イ）かんがい排水施設一六カ所
（ロ）機械器具生産資料 三二八件（一億六、二〇〇万円）
- ⑤町道被害 五一カ所（二、一六八m・二、一八二万円）
- ⑥橋梁流出四、一部流失一・（二、〇五〇万円）
- ⑦河川・その他（五億七、〇九〇万円）
- ⑧合計 七億七、五二二万円

改正され、五八年四月、神門に「神門コミュニティセンター」がオープンした。前畑公園が開園したのもこの年。六〇年には中新田公園も完成している。また六三年五月には、永年の懸案であった漁業資料館が神門に完成。同年一〇月には人見大橋が完成した。同橋は、君津市が都市計画に沿って施工したもので、人見土地区画整理組合も記念事業の一環として上部構造の一部を設計段階から担当したものである。一〇月八日、人見自治会ならびに人見土地区画整理組合の主催によって人見大橋竣工式ならびに高欄除幕式が行なわれた。

また、昭和六四年一月七日午前六時三三分、昭和天皇が皇居・吹上御所で崩御された。お年は八七歳であった。このため、直ちに皇太子明仁親王が新天皇に即位され、一月八日午前零時から新しい元号「平成」がスタートした。新元号は、先例に従って中国の古典からとられた。『史記』の「五帝本記」のなかにある「内平かに外成る」、『書経』の「大禹謨」にある「地平かに天成る」という文章のなかからそれぞれ「平」と「成」の文字を組み合わせたものである。政府は、その意味を「国の内外にも天地にも平和が達成される」（首相謹話）と説明している。

このように時代は移り変わり、「水と緑の田園工業都市」を標榜する君津市もまたその歴史のなかで大きな変貌をとげた。そして、人見地区もその君津市の動きに伴って大幅な発展をとげてきたが、さらにこの郷土が古い伝統を守り、新しい文化を創成しながら、限りなく前進することを期待したいものである。